

INTERVIEW

インタビュー 早川 光

『湧き水の向こうに見えるもの』



早川 光氏

映画監督 1961年、東京新宿区生まれ。'84年、初の劇場用映画『アギ・鬼神の怒り』をアボリアッツ国際ファンタスティック映画祭に出品。最終選考に選ばれる。映画以外では水と料理への関心が高く、'88年の『東京の自然水』を皮切りに『名水巡礼東京八十八箇所』『おいしい水で料理が変わる』『ミネラルウォーター・ガイドブック』他多数。10月末に「江戸前ずしの悦楽」(晶文社出版)を上梓。現在は、月刊誌『東京人』に料理に関するエッセイ「舌鼓十二カ月」を連載中。



<http://www02.so-net.ne.jp/m-water/>

早川氏が個人で開設しているミネラルウォーター専用のホームページ。目からうろこが落ちる情報が満載されています。



早川氏の最新刊(マガジンハウス)

「一番おいしいと思う水は？」という質問に、二位以下に大差をつけて「湧き水」と回答した方が多数いらっしゃいました(7頁)。この結果について、“湧き水とミネラルウォーター”の専門家でもある映画監督の早川光氏にお話をうかがいました。

映画監督が 水にこだわったきっかけ

一九八五(昭和六〇)年頃に、昭和三〇年代を題材とした映画を撮る計画があり、東京でも古い町をロケハンして歩いていました。ちょうどパブルの前頃で、古い街並みがどんどん更地になっていった頃。その時に、自分が東京生まれなのに、知らなかったことがかなりでてきた。「都心に湧き水がある」「蛭の養殖をしている」「わさび田がある」。その時の経験を『東京迷走大図鑑』『東京の自然水』にまとめたのです。最初は、東京という都市と湧き水の不可思議な関係のおもしろさに惹かれていただけだったんですが、ミネラルウォーターブームとも重なって、水そのものを徹底的に調べるようになり、知識の蓄積もでき、九〇年代になり、ミネラルウォーターをテーマに文章を書き始めた次第です。

15年間 変わる水への志向

九〇年代前半位まで、人々の水への関心は「味」なんです。ね。「おいしい水」が最重要でした。次に、水を「飲む」という形だけではなく、お茶を入れるとかコーヒーを入れる、炊飯、だしを取るといった、違う利用法についての関心が生まれ、「水の使い分け」という発想が出てきます。

九五年頃だったと思います。飲むのはミネラルウォーター、料理は水道や浄水器。その時に何を基準にして水を使い分ければよいのか、どこまで浄水器で済み、どこからミネラルウォーターかという質問を結構受けました。『ミネラルウォーターガイドブック増補版』でも、「硬度いくつが何に向いているのか」ということを実験データに基づいて書いたわけです。そして去年、環境ホルモン問題がクローズアップされ、純粋に水の汚染の問題、「安全かどうか」と「飲んで健康によいのか」という質問を

多く受けるようになりました。明らかに水に対して内向きになってきている。グルメブームの時に、水ブームが高まったわけですが、その時は「味」が問題にされていた。それが「水の利用法」という関心を経て、最近では「安全性+健康への適性」です。

今回の調査 「湧き水のイメージ」が トップに立つことの意味

回答者は都市圏の方ですよ。溪流の水、自然の水、大自然の中から湧き出てくる水、森の中からこんこんと湧き出てくるというイメージが、都市生活者にとっては美しいものの象徴になっているのだと思います。

ただ、実際は、湧いて出てくる湧き水も地下に入っている井戸水も、同じ地下水ということで成分的にも内容的にも差異がない。むしろ地表に出てきた分だけ、様々な地表水と混入してしまつた危険もあり、「湧

き水だから安全でおいしい」というわけではありませぬ。でも、都市生活者の幻想として、湧き水というのが非常に美化されているということでしょうね。

それと、どうも目の前で湧いている所を見ないと、市販のミネラルウォーターは中身が信用できないと思っっている方もいるかもしれませんね。

ミネラルウォーターがどういふものなのか、あるいは井戸の水と湧き水がどう違うのか一般の方に正しい知識が浸透していないのでしょ。

ナチュラルウォーター

ミネラルウォーター

ボトルドウォーター

一九九〇年に農林水産省が出した「ミネラルウォーター類の品質ガイドライン」があります。その大きな分け方がナチュラルウォーター、ミネラルウォーター、ボトル



ドウォーターという三分類です。わかりやすくいうとナチュラルウォーターというのは、最小限の処理で出している。ミネラルウォーターは違う水源の水を混ぜ合わせたリ、ミネラル分の調整をしている水。ボトルドウォーターは飲用水なら何でもいい。河川の水でも、水道水をつめても、水道法の「飲用適」であればいい。おおまかな分け方です。日本では湧水と地下水の分類があいまいですが、本当は地表に湧いてしまった水は、厳密に言えば「地下水」ではないわけです。地表の外に出た瞬間で空気に触れ、しかもそこに雨水とか周囲の有機物とかが混入してくる可能性がります。湧き水が湧いている泉は、見た目がきれいだから安全かということでもない。幻想なんです。特に最近、山奥の湧き水の出る裏に産業廃棄物処理場やゴルフ場があったりする所もあり、むしろ都心部の方が、工場もないしゴルフ場もないし安全だという言い方もできるわけです。

おいしい水と地下水の関係

地下水にもいろいろあります。地下水は地下に入った雨水が地層に浸透して濾過され、地下水脈になるわけですが、その段階で、周囲の岩石などのミネラルを溶かし込むわけです。でも、おいしい、おいしくなっていくのは、それに加え、地層の条件が影響するわけです。地層によっては鉄分など金属イオンの多い水になる。苦灰岩の地層ではマグネシウムが多く、石灰岩が多いとカルシウムが多くなる。日本の場合、火山国なので、火山岩の成分がとけ込んだりしますし、味は地層の構造によって決まってきます。

日本の場合は、たまたま日本の地層構造の大部分が火山岩で構成されていて、比較的水を浸透しやすい地層にあり、短時間に地下水がでかかります。しかし、その分ミネラル分が含まれにくい。だから、日本の水は軟水であり、歴史的にも軟水を飲み続けてきました。それゆえに、日本人は軟水こそがおいしい水と思っています。

今回の意識調査で、一番おいしい水を飲める国としてスイスやカナダが挙げられますが、やはり、きれいな山があつて、水河があつたり、ピュアというイメージがあるのでしょ。実際には、スイスと日本とは全く違う地層構造をしています。スイスの水は硬度の高い水が多い。カナダは日本と同じ環太平洋火山帯に位置しており、日本の水に比較的近い。カナダ、スイス、スウェーデン、どれも氷河というイメージですが、山のあくまでも表面しか見ていな

いわけです。水の成分構成とか味を決めるのは、地層であつて地表ではありません。

ヨーロッパについての湧き水

ヨーロッパで同じ様なアンケートをとった時に、おそらく「湧き水が一番おいしい水」という回答はでないと思つたんですね。日本の湧き水の場合、浅い所に水脈がある。ですから、崖地など浅い所にある水脈が断ち切られて出てくる。それが湧き水なんですけれど、ヨーロッパにそういう所はあまりないですね。むしろ、地下の深い所にある水脈が地殻変動などによって切れ、その切れ目から噴出してくる。泉ですね、スプリングウォーター。日本の湧き水は地層の切れ目からちよるちよる出てくるスタイルですけれど、ヨーロッパの場合、泉のように噴出してくる形が多い。ですから、水が地下深くにあることで安全性が保たれているというイメージが非常に強くなる。

加えてヨーロッパ人は川の水を飲むことでベストやコレラに感染して、国が減るような経験を何度もしているので、泉の水をものすごく大切にします。キリスト教にまつわる奇跡伝説があるぐらい、水は神聖なものであるというイメージがある。泉が非常に貴重なものであるために、手厚く保護するわけです。今、ヨーロッパでは厳格な水源保護が行われていますが、そういう考え方は中世からありました。

